中古日本語の形容詞形態論

―形容詞の語幹と接辞の分類と諸形式の形成の機序―

土井 康司*（岡山県立新見高等学校）

要旨

従来の分析に残された中古日本語における形容詞の語幹と接辞の分析に係る諸問題の解決を図った。終止形，連用形，連体形，已然形，命令形について，形容詞と接辞の連なり方を分析した。生成音韻論的分析手法を用いて，接辞に連なる形式を含む形容詞の語幹について，それぞれの表層形と基底形，それらが連なる際の音韻規則を想定した。中古日本語の形容詞の語幹はその末尾の音素により２種類（母音語幹・子音語幹）に分類できた。形容詞の接辞の基底形はその音素排列により４種類（終止・感動・連用・連体）に収斂できた。形容詞の語幹や接辞が基底形で連なるときに正しく表層形を生成するための音韻規則が明らかになった。本稿の手続きを踏まえると，形容詞の語幹と接辞の境界を厳密に規定できると明らかになった。併せて『日本語歴史コーパス』から得られた用例を活用し，形容詞の詠嘆形の形成の機序を解明した。

キーワード：中古日本語形態論，形容詞詠嘆形，形容詞感動形，形態音韻論，生成音韻論

1.　はじめに

本稿は中古日本語の形容詞に係る形態論上の課題，特に語幹と接辞の分類と諸形式の形成の機序の本質を解明することを目的とする。形容詞とそれに下接する形態に関する新たな分析を試みる。影山（2019：15）は「伝統文法の活用表には様々な問題が指摘されている」，「最も重大な問題は活用語尾と屈折語尾が混同され，どこまでが動詞の語幹で，どこからが屈折語尾なのかが判然としない点にある」と指摘している。この指摘は，その「動詞」という箇所を「形容詞」に置き換えたとしても，そのまま成り立つと言える。本稿ではその「活用」という概念の問題を含めて，判然と解決することを試みる。

2.　形容詞とその後接要素についての先行研究

2.1.　学校文法・伝統文法

ここでは従来，中古日本語の形容詞と後接する要素とがどう体系化されてきたか記す。まず「活用」という概念に注目する。「活用とは，動詞や形容詞など，述語になる語がその機能に応じて形を変えること」であり「学校文法の活用の記述は，ひらがなを単位」とする（野田 2014：108）。学校文法では表 1 のような「活用表」を用いて形容詞の「語幹」と「活用」が示される。（表 1 は『旺文社古語辞典〔第 10 版増補版〕』（松村ら（編）2015）を参考に作成した。）

表 1　学校文法における古語の形容詞活用表（活用型 2 種・活用形 6 種。）

活用型（活用の種類）	古語の動詞		活用形					
	例語	語幹	未然	連用	終止	連体	已然	命令
ク活用	高し	たか	から	く かり	し	き かる	けれ	かれ
シク活用	美し	うつく	しから	しく しかり	し	しき しかる	しけれ	しかれ

高山（2011：33）には「学校文法における形容詞の活用に関しては，次のような問題がある。学校文法では，活用語を「語幹」「語尾」に分け，語幹は活用する際に形が変わらない部分，語尾は形が変わる部分とする。ク活用についてはいいが，シク活用では問題が起こる。」とする。高山（2011）は例として「うれし」を挙げ，「シク活用で形が変わらない部分は「うれし」であり，語幹が終止形と一致することになる。つまり終止形「うれし」は語幹のみで語尾がないことになってしまう。シク活用はこのような矛盾点を抱えているのである」と指摘している。

2.2.　小田（2015）

前述の課題について「活用」という概念を維持しながら解決を図る研究としては例えば，

小田（2015：265-271）は「「美し」の語幹が「うつく」ではなく「うつくし」までであるというのは，相当に根拠があることなのである。…語幹が現れる環境（引用者注：あな＋形容詞語幹）に，シク活用の後は「し（じ）」の部分までが現れるし，［を＋語幹＋み］の句型でも「風をいたみ」（百 48）に対して「野をなつかしみ」（万 1424）のようになる。また，語構成でも「にくーむ／くるしーむ」，「らうたーがる／ゆかしーがる」，「きよーげなり／うつくしーげなり」のように，語幹が現れる部分に，シク活用は「し（じ）までが現れる。これは，シク活用の語の語幹が「し（じ）」までである証拠である」と述べ，表 2 のように整理する（引用文中の…は中略を表す。以下同様。）。また，形容詞の順接仮定表現の分析を踏まえて「未然形」に「く」を表示し，補助活用を含めたものを表 3 のように整理している。

表 2　小田（2015）による古語の形容詞の活用

		語幹	連用形	終止形	連体形	已然形
ク活用	高し	たか	く	し	き	けれ
シク活用	美し	うつくし	く	ーφ	き	けれ

表 3　小田（2015）による古語の形容詞の活用表

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
く	く	し／ーφ	き	けれ	○
から	かり	○	かる	○	かれ

2.3.　Frellesvig（2010）

Frellesvig（2010：232-234）によると表 4 のようになるという。表 4 内の日本語は引用者訳。

表 4　Frellesvig（2010）による EMJ adjectival copula forms

Base（語基）		*taka-*	*asi-*
		‘tall’	‘bad’
Finite（定形）			
Conclusive（終止）	*si*	*taka-si*	*asi*
Adnominal（連体）	*ki ~ i*	*taka-ki ~ taka-i*	*asi-ki ~ asi-i*
Exclamatory（詠嘆）	*kere*	*taka-kere*	*asi-kere*
Non-finite（不定形）			
Infinitive（不定詞）	*ku ~ u*	*taka-ku ~ taka-u*	*asi-ku ~ asi-u*
Gerund（動名詞）	*kute ~ ute*	*taka-kute ~ taka-ute*	*asi-kute ~ asi-ute*
Conditional（条件）	*kupa > kuwa*	*taka-kupa ~ taka-kuwa*	*asi-kupa ~ asi-kuwa*
Provisional（仮定）	*kereba*	*taka-kereba*	*asi-kereba*
Concessive（譲歩）	*keredo(mo)*	*taka-keredo(mo)*	*asi-kere(do)*

2.4.　清瀬（2013）

清瀬（2013：47-49，200-204）は，「形容詞」を「形状動詞」とし，「連結母音」「連結子音」という概念を用いて，形容詞について次のように分析する。

> 非完了終止形の「高し」「速し」は形態素的に taka-si，paya-si と分たれ，語幹の taka-や paya-は母音で終る語幹と認められるが，同じく「楽し」「苦し」は形態素的には tanos-i，kurus-i と分たれ，語幹の tanos-や kurus-は子音終止であった。これらの例からも分る通り，非完了態の終止形を作る接尾辞いは-si と-i との二形が在り，前者は母音語幹に附き，後者は子音語幹に附くという様に，相補分布を成しているものであるから，この二者は同一接尾辞の異形態という事になる。しかも，-si における子音の s は母音語幹と結合する際にのみ顕在し，子音語幹と結合する際には潜在してしまって単に-i の形を取るのであるから，この子音は連結子音と看做され，両者は-(s)i と表記し得る一個の接尾辞である事が知られる。

併せて，「非完了態の連体形も，「高き」「速き」は形態素的に taka-ki，paya-ki であり，「楽しき」「苦しき」は同じく tanos-iki，kurus-iki であるから，ここに現れる接尾辞-ki と-iki の二形に関しても，連結母音 i を持つ一個の接尾辞-(i)ki の異形態に過ぎない事がよく知られる。形状動詞の順接連用形を形成する文法接尾辞は，「高く」taka-ku 及び「楽しく」tanos-iku の例に見られる通り，連結母音 i を持つ-(i)ku であった。」とする。この他，「因由連用形を作る接尾辞-(i)kereba」，「譲歩連用形の接尾辞-(i)keredomo」等を設定している。また，学校文法に謂うところの「補助活用」については，「動作動詞化の派生接尾辞-(i)kar-」を設定し，「形状動詞語幹たる taka-や tanos-を動作動詞語幹たる taka-kar-や tanos-ikar-に変え，然る後に文法接尾辞の-(i)ki が附いて taka-kar-iki，ママ- tanos-ikar-iki の形を成したものである。」という。なお，中古語の形状動詞の順接仮定表現に関わる言及はなされていない。こうした説明を整理し，学校文法による説明との対応を示したものが，次の表 5 である。

表 5　清瀬（2013）に基づいた古語の形状動詞の体系と学校文法による説明との対応

	高し	楽し	接尾辞	学校文法による説明
区別	母音語幹 形容詞	子音語幹 形容詞		
語幹	taka	tanos		
非完了終止形	-si	-i	-(s)i	「終止形」
非完了連体形	-ki	-iki	-(i)ki	「連体形」
順接連用形	-ku	-iku	-(i)ku	「連用形」
因由連用形	-kereba	-ikereba	-(i)kereba	「已然形」＋助詞「ば」 （順接確定条件）
譲歩連用形	-keredomo	-ikeredomo	-(i)keredomo	「已然形」＋助詞「ども」 （逆接確定条件）
動作動詞化	-kar-	-ikar-	-(i)kar-	補助活用（カリ活用）

2.5.　先行研究のまとめ

以上を踏まえると，古語のいわゆる形容詞の分析にかかる問題点としては，第一に，形容詞の非完了終止形形成の接尾辞について「-si／－φ」と見るか「-si／-i」と見るかという点が挙げられる。第二に，形容詞の「非完了終止形形成の接尾辞」以外の接尾辞の形式（-ki, -ku, -kereba, -keredomo, -kar-等）には，いずれも音素/k/が含まれているが，各形式が更に小さい複数の形態素に分析できないのか，という点が挙げられる。次節以降の私見ではその課題の解決を試みる。

3. 私見——生成音韻論的分析手法を用いて

先行研究に残された課題を解決し，形態論・音韻論の観点から文法的概念を構築するべく本稿では表 1 に示した形容詞について考察する。形容詞のいわゆる活用形に後続する語を連ねたものやその他の用法の一覧を表 6 に示す。また，名詞や助詞の直前には記号 = を附す。村木（2014）によると「語幹」は「語形変化する単語のすべての語形にあらわれる部分」だとされる。この定義に従えばこの表の行ごとに，ローマ字で示した音素排列の先頭から全ての活用形に共通している音素列はそれぞれ形容詞の「語幹」と言える。「語幹」を除外した残りの音素列は非「語幹」としておく。

表 6　形容詞のいわゆる活用形に，後続する語を連ねたもの（古語）

	活用の種類	ク活用		シク活用	
	語例	高し		美し	
後続形式	助動詞「ず」		takakarazu		utukusikarazu
	助詞「て」	takaku=te		utukusiku=te	
	助動詞「けり」		takakarikeri		utukusikarikeri
文末形式（終止）		takasi		utukusi	
後続	名詞	takaki=koto		utukusiki=koto	

形式	「こと」				
	助動詞「べし」		takakarubesi		utukusikarubesi
文末形式（「こそ」の結び）		takakere		utukusikere	
文末形式（命令）			takakare		utukusikare
感動詞「あな」に続く形式		taka		utukusi	

本稿では「異形態が存在する時，共通する基底形を設定し，実際に出てくる形はこの基底形から派生されたと考える」（西山 2012：156）という生成音韻論の立場を取る。この「実際に出てくる形」を表層形とする。本稿では，語幹の基底形を「語幹基」といい，接辞の基底形を「接辞基」ということにする。なお，西山（2012）にいう「語根」は本稿の「語幹基」に相当する。「語幹基」を再想定するため，まず主に文終止を導く機能的な形式（終止形）について分析する。

3.1. 本活用

3.1.1. 終止形・感動形

福田（2019：121-143）は中古語の終止形を含めた分析において，「話者が，命題が真である蓋然性を 1 と判断する叙法（すべて非接続叙法形式によって表される）のうち，命題の時（＝観察可能時。……）を時間軸上に定位しないものを〔確言〕とする。確言は句接辞-u によって表される」とし，「確言の句接辞｛-u：/-u（1）/～/-u（2）/～/-e/～/-i/～/-る（1）/～/-る（2）/～/-れ/～/-φ/～/-し/～/-き/～/-けれ/｝の異形態」の分布を示すが「-u の諸形態は同一語の異形態と見ることができ，それらの選択は言語慣習によるものであったと考えられる」とする。ここでその「言語慣習」とは何なのか説明が必要ではないだろうか。異形態の処理とその動機づけを解明し，その形式の形成の機序を明らかにしなければならない。

表 6 について，前述した形容詞の非完了終止形形成の接尾辞について「-si／－φ」と見るか「-si／-i」と見るかを考えたとき，私は後者の考え方を採用する。なぜなら，形容詞の非完了終止形形成の接尾辞を「-si／-i」と見ることで，「語幹」と「語尾」とは厳密に区別できるようになるからである。また，ク活用形容詞を母音語幹形容詞，シク活用形容詞を子音語幹形容詞として捉えなおすことができることは，つまり，両者を形態音韻論的に区別することが可能となることを意味するからである。そうすることで，従来「語幹」用法とされていながら，実際には純然たる「語幹」であるか「語尾」を含むものであるか曖昧な形式であって，ク活用がそうであるから「語幹」用法だと間接的にしか説明できていなかったシク活用の語幹用法（感動詞「あな」に続く形式）が，次の表 7 通り説明可能となる。表 7 の/-Ø/は，形態音韻論上の音韻操作（母音(i)削除）によって脱落した結果，音素が潜在化したものと考えて，既出の/-φ/とは区別する。もっとも，表 8 のように分析できるのではとの疑いが生じるかもしれない。確かに，文末形式（終止）として/-si/を選択するか，/-φ/を選択するかについて，表 8 の分析では，語幹末の音素はどちらも母音であり，もっぱらク活用は語幹末音素が/-a/, /-u/, /-e/, /-o/であって, シク活用は語幹末音素が/-i/であるということで区別が付きそうなものではある。しかし，ク活用にも数少ないとはいえ，語幹末がイ列音の形容詞「キビシ」，「ヒキシ」もある（蜂矢 2014：317-332）以上，文末形式（終止）として/-si/を選択するか，/-φ/を選択するかを語幹末の音素によって区別することができないことになってしまい，このことは，語形成上の経済性・合理性を損ねることになる。

したがって，形容詞の非完了終止形形成の接尾辞（略して「終止の接辞」）を「-si／-i」とする。そうすることで，形容詞語幹と後接要素の連なりを分析し，それぞれの境界を判然とさせることができる。

表 7　形容詞のいわゆる終止形と語幹用法（古語）の形態音韻論的分析

	ク活用形容詞	シク活用形容詞	後接接辞	形態素
文末形式（終止）	taka-si	utukus-i	-si ~ -i	/-(s)i/
感動詞「あな」に続く形式	taka-(i)	utukus-i	-Ø ~ -i	/-(i)/

表 8　形容詞のいわゆる終止形と語幹用法（古語）の従来の分析

	ク活用形容詞	シク活用形容詞	後接接辞
文末形式（終止）	taka-si	utukusi	-si ~ - ϕ
感動詞「あな」に続く形式	taka	utukusi	- ϕ

以上のことを踏まえ，前掲の表 6 について，行ごとに「語幹」とそれ以外とを分離して，かつまた，非「語幹」の音素列についても列ごとに，ローマ字で示した音素排列上，共通している音素列の前に，-の記号を附し，一覧にすると表 9 のようになる。なお，村木（2014）による「語幹」の定義に従った私見における「語幹」は，丹羽（2012：48-50）が「語幹」の「核」として捉えている部分に相当するが，私見での「非「語幹」」は，丹羽（2012）が「語幹」の一部として捉える「接辞」と「語幹」の外部として捉える「文成立形式」とを区別して捉えたものを区別せずに指すものである。語幹基の末尾の音素が母音であるものを「母音幹基形容詞語幹基」略して「母音幹基」，語幹基の末尾の音素が子音であるものを「子音幹基形容詞語幹基」略して「子音幹基」とする。なお，（表層形の）語幹の末尾の音素が母音であるものを「母音幹形容詞語幹」略して「母音幹」，語幹の末尾の音素が子音であるものを「子音幹形容詞語幹」略して「子音幹」としておく。（想定される）語幹基と接辞基とが連なり，（想定される）音韻操作が施されることで，（実測される）表層形（語幹-接辞）が現れるとすると，基底形はいかなる音素列を有していても構わないが，より単純な音韻操作（規則）で表層形を出力できる音素列にしておくことが望ましい。また，規則を表記する際，形容詞について，語幹基の末尾の音素が母音であれば，/~V/，子音であれば，/~C/ とする。符号 ~ は任意の音素列を現すが，一般的に音素列 /~V/ でも，音素列

/~C/ でも，~ 部はどちらの音素列も子音と母音とが交互に排列されたものであるということを前提としておく。その上で，本稿においては，表層形同士で共通する末尾音素をもつ形態素については，共通する基底形から派生して表層形を成すと考え，表層形同士には共通する末尾音素をもたない形態素については，異なる基底形から派生して表層形を成すと考えることにする。このとき（1）～（2）の規則が成り立つ。この規則に基づき形容詞の終止形，「あな」に続く形式の基底形と表層形の一覧を表 10 に示す。なお，「あな」に続く形式を感動形とし，それを形成する接辞を感動形形成接辞（略して「感動の接辞」）とする。なお，いわゆる形容詞の語幹用法とされているものには，「あな」に続く形式であるのものの他にも複数の用法がある。蜂矢（2014：16）によると，「感動詞とともに」用いられる文末用法の他にも，「名詞的に」，「副詞的に」，「形容詞として」，「連体修飾語として」，あるいは「語の構成要素として」それぞれ用いられている例が挙げられている。しかしながら，本稿は，その語幹用法とされているもののうち，「あな」に続く形式のものを取り立てて「感動形」とするものである。この他の語幹用法全てについて「形容詞語幹」＋「感動形」によるものとするわけではない。「あな」に続く形式でないもので，従来語幹用法とされてきたものについては，派生語や複合語に関わる議論となるため本稿では立ち入らない。

表 9　形容詞のいわゆる活用形に，後続する語を連ねたもの（古語）２

	活用の種類	ク活用		シク活用	
		本活用	補助活用	本活用	補助活用
	語例	高し		美し	
後続形式	助動詞「ず」		taka-kar-azu		utukus-ikar-azu
	助詞「て」	taka-ku=te		utukus-iku=te	
	助動詞「けり」		taka-kar-ikeri		utukus-ikar-ikeri

文末形式（終止）		taka-si		utukus-i	
後続形式	名詞「こと」	taka-ki=koto		utukus-iki=koto	
	助動詞「べし」		taka-kar-ubesi		utukus-ikar-ubesi
文末形式（「こそ」の結び）		taka-kere		utukus-ikere	
文末形式（命令）			taka-kar-e		utukus-ikar-e
感動詞「あな」に続く形式		taka-Ø		utukus-i	
語幹		taka		utukus	

（1） 形容詞が文末形式（終止）をとるときの音素列

a. 母音幹基-終止の接辞基：/~V/-/(s)i/→~V-si：母音幹-終止の接辞

b. 子音幹基-終止の接辞基：/~C/-/(s)i/→子音(s)削除→~C-i：子音幹-終止の接辞

（2） 形容詞が感動詞「あな」に続くときの音素列

a. 母音幹基-感動の接辞基：/~V/-/(i)/→母音(i)削除→~V-Ø：母音幹

b. 子音幹基-感動の接辞基：/~C/-/(i)/→~C-i：子音幹-感動の接辞

表 10　形容詞の終止形と感動形（いわゆる語幹用法の一）（古語）の形態音韻論的分析

		終止形（基底形）			終止形（表層形）	
活用型	形容詞	語幹基	語幹基末	接辞基	語幹	接辞
ク活用	高し	/taka/	母音	/-(s)i/	taka	si
シク活用	美し	/utukus/	子音		utukus	i
		感動形（基底形）			感動形（表層形）	
活用型	形容詞	語幹基	語幹基末	接辞基	語幹	接辞
ク活用	高し	/taka/	母音	/-(i)/	taka	Ø
シク活用	美し	/utukus/	子音		utukus	i

3.1.2.　連用形・連体形・詠嘆形

連用形とは形容詞の語幹に，意味的な接辞のうち中止の接辞やいわゆる助詞「て」を後接できる接辞（連用形形成接辞）が連なったものを指し，連体形とは形容詞の語幹に，名詞・

助詞・特定の接辞を後接できる接辞（連体形形成接辞）が連なったものを指す。意味的な接辞（中止の接辞やいわゆる助詞「て」）を後接できることを〈連用〉の機能，名詞・助詞・特定の接辞を後接できることを〈連体〉の機能と呼ぶ。また，「こそ」に呼応して「結び」となる形式の呼称については，Frellesvig（2010）に倣って「詠嘆形」とする。詠嘆形を形成するために語幹に後接する接辞を詠嘆形形成接辞という。

表 9 の本活用の列に着目して，動詞の非「語幹」の音素の排列について，その先頭の音素が，/k/または/i/である接辞/-ku ~ -iku/, /-ki ~ -iki /, /-kere ~ -ikere/ に着目する。これらはそれぞれ，連用形形成接辞，連体形形成接辞，詠嘆形形成接辞といえる。ローマ字で示した音素排列に着目すると，ここで，形容詞の連用形形成接辞・連体形形成接辞・詠嘆形形成接辞は，形容詞の語幹の末尾が子音であれば，接辞の先頭に i という音素が現れていて，形容詞の語幹の末尾が母音であれば，接辞の先頭に k という音素列が現れているという規則を仮定することができる。以上の仮定を踏まえ，子音語幹形容詞に後接する接辞/-iku/,/-iki/,/-ikere/と母音語幹形容詞に後接する接辞/-ku/,/-ki/,/-kere/とについて，筆者は連用形形成接辞基（略して「連用の接辞基」）として/-(i)ku/，連体形形成接辞基（略して「連体の接辞基」）として/-(i)ki/，詠嘆形形成接辞基（略して「詠嘆の接辞基」）として/-(i)kere/という形態素を仮定する。これらの接辞基が子音語幹形容詞に後接するときは，音韻操作がなく，そのまま表層形になるが，母音語幹形容詞に後接するときは，音韻操作として，接辞基の先頭の母音を削除してから表層形になると考える。このとき（3）～（5）の規則が成り立つ。この規則に基づき動詞の連用形，連体形，詠嘆形の基底形と表層形の一覧を表 11 に示す。

（3） 形容詞が〈連用〉の機能を果たすときの音素列

a．母音幹基-連用の接辞基：/~V/-/(i)ku/→母音(i)削除→~V-ku：母音幹-連用の接辞

b．子音幹基-連用の接辞基：/~C/-/(i)ku/→~C-iku：子音幹-連用の接辞

（4） 形容詞が〈連体〉の機能を果たすときの音素列

a．母音幹基-連体の接辞基：/~V/-/(i)ki/→母音削除→~V-ki：母音幹-連体の接辞

b．子音幹基-連体の接辞基：/~C/-/(i)ki/→~C-iki：子音幹-連体の接辞

（5） 形容詞が「こそ」に呼応して「結び」となるときの音素列

a．母音幹基-詠嘆の接辞基：/~V/-/(i)kere/→母音削除→~V-kere：母音幹-詠嘆の接辞

b．子音幹基-詠嘆の接辞基：/~C/-/(i)kere/→~C-ikere：子音幹-詠嘆の接辞

表 11　形容詞の連用形・連体形・詠嘆形の基底形と表層形

		連用形（基底形）			連用形（表層形）	
活用型	形容詞	語幹基	語幹基末	接辞基	語幹	接辞
ク活用	高し	/taka/	母音	/-(i)ku/	taka	ku
シク活用	美し	/utukus/	子音		utukus	iku
		連体形（基底形）			連体形（表層形）	
活用型	形容詞	語幹基	語幹基末	接辞基	語幹	接辞
ク活用	高し	/taka/	母音	/-(i)ki/	taka	ki
シク活用	美し	/utukus/	子音		utukus	iki
		詠嘆形（基底形）			詠嘆形（表層形）	
活用型	形容詞	語幹基	語幹基末	接辞基	語幹	接辞
ク活用	高し	/taka/	母音	/-(i)kere/	taka	kere
シク活用	美し	/utukus/	子音		utukus	ikere

3.1.2.1.　補助活用

命令の接辞や意味的な接辞のうち否定の接辞・使役の接辞・受動の接辞・回想の接辞等，種々の接辞は，形容詞の語幹に直接後接することができない。そのため，前掲の表 9 のように/-kar- ~ -ikar-/を介することで，種々の接辞を後接することができる。このことを踏まえると，表 12 のように示すことができる。なお，/-(i)kar-/という形式に含まれる/-ar-/については，「「あり」は上に形容詞を受けその連用形の語尾「く」と熟合して「かり」といふ形を

なすことあり。今これを形容存在詞といふ」（山田 1948：273）とあるが，本稿では「形容詞」の「連用形」/-(i)ku/に「存在詞」/-ar-/ が下接し，音素列/-(i)ku-ar-/ の/u/ が母音脱落して，/-(i)kar-/ へと音韻変化し文法化したもの，つまり連用形の用法の一種が文法化したものであり，/-(i)kar-/（表層形）を「形容存在詞」と呼ぶという立場をとる。形容詞補助活用の命令形は，形容詞連用形に存在詞を介して命令の接辞が連なった基底形/-(i)ku-ar-e/から母音脱落を経て表層形/-(i)kar-e/が導かれたものと捉えられる。なお，詠嘆形は定義上文末とするため，後続形式を要する補助活用/-(i)kar/を含むものとは考えられない。

表 12　形容詞の連用形・連体形・命令形の基底形と表層形

		連用形（基底形）			連用形（表層形）	
活用型	形容詞	語幹基	語幹基末	接辞基	語幹	接辞
ク活用	高し	/taka/	母音	/-(i)ku/	taka	ku
シク活用	美し	/utukus/	子音		utukus	iku
補助活用	高し	/taka/	母音	/-(i)kari/	taka	kari
	美し	/utukus/	子音		utukus	ikari
		連体形（基底形）			連体形（表層形）	
活用型	形容詞	語幹基	語幹基末	接辞基	語幹	接辞
ク活用	高し	/taka/	母音	/-(i)ki/	taka	ki
シク活用	美し	/utukus/	子音		utukus	iki
補助活用	高し	/taka/	母音	/-(i)karu/	taka	karu
	美し	/utukus/	子音		utukus	ikaru
		命令形（基底形）			命令形（表層形）	
活用型	形容詞	語幹基	語幹基末	接辞基	語幹	接辞
ク活用	高し	/taka/	母音	（なし）		
シク活用	美し	/utukus/	子音			
補助活用	高し	/taka/	母音	/-(i)kare/	taka	kare
	美し	/utukus/	子音		utukus	ikare

3.1.2.2.　文末形式（「こそ」の結び）の「詠嘆形」（いわゆる本活用「已然形」）について

形容詞の「こそ」の結びとしての文末形式「詠嘆形」は表 11 のような形態を示す。ここで，①「こそ」の結びはいわゆる「已然形」で結ぶ形式の現れる以前に，「連体形」で結ぶ

形式が成立していたこと（鶴 1963 他），②形容詞の用例として，国立国語研究所（2023）『日本語歴史コーパス　平安時代編｜仮名文学』を検索すると「主殿司こそ，なほをかしきものはあれ。」（清少納言 1001『枕草子』[1]）という文があるが，これは「主殿司こそ，なほをかしけれ。」と同義文であるし，「なほなほしき人の際こそ，今様とては氏改むることのたはやすきもあれ，など思しめぐらすに」（紫式部 1010『源氏物語』[2]）という文は「…氏改むることもたはやすけれ」と同義文であると考えられることから，形容詞の「詠嘆形」は「連体形」に「存在詞」としての「あり」の「詠嘆形」が後接して母音融合の結果として縮合したものと仮定することができる。早田（2017：85-86）には「動詞活用」の分析の文脈ではあるが「已然形は「連体形＋何か名詞的なもの」と考えられる」とある。本稿では，形容詞の場合にも，その分析を適応して考える。上述①・②を踏まえると，形容詞は，「こそ」の結びとして選択的に「形容詞連体形」（＋名詞「もの」）＋助詞「は／も」＋存在詞「あれ」（「あり」の詠嘆形）という形式を取ることができる。「形容詞連体形」がいわゆる準体法を取り，助詞も不要な場合であれば，「形容詞連体形」＋存在詞「あれ」という形式になると考えられる。その場合，母音連続を解消するために母音融合が起きると考えることができる。すると，形容詞の詠嘆形の基底形と表層形は表 13 のように改めて示すことができる。したがって，形容詞の詠嘆形は，連体形の準体法の用法の一種が文法化し，音韻変化（母音融合）を経た形式であると言える。つまり，詠嘆形形成接辞の基底形（詠嘆の接辞基）は，連体形に由来するものであると考えられる。

---

[1] 大学共同利用期間法人人間文化研究機構『日本語歴史コーパス』をコーパス検索アプリケーション「中納言」を用いて採録した用例文（サンプル ID，開始位置：20-枕草 1001_00045，100）である。https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html#kanabungaku（2024 年 8 月 15 日確認）以下，同様に採録した用例文は，『日本語歴史コーパス』と示し，併せてサンプル ID と開始位置とを示す。

[2] 『日本語歴史コーパス』（サンプル ID，開始位置：20-源氏 1010_00029，24330）

表 3　形容詞の詠嘆形

		詠嘆形（基底形）			音韻操作	詠嘆形（表層形）	
活用型	形容詞	語幹基	語幹基末	接辞基	母音融合	語幹	接辞
ク活用	高し	/taka/	母音	/-(i)ki-ar-e/	i-a→e	taka	kere
シク活用	美し	/utukus/	子音			utukus	ikere

3.2.　私見のまとめ

3.2.1.　形容詞の語幹（基）及び接辞（基）の分類と諸形式の形成の機序

前節の議論を踏まえ筆者は，形容詞の語幹（基）について，その語幹（基）末の音素から 2 種に分類する（表 14）。また，これまでの議論で仮定した音韻操作と音素の関係は表 15 のような表で把握できる。中古日本語の形容詞の語幹と接辞の基底形は，その末尾の音素により 2 種類に分類できた。形容詞語幹に連なる接辞の基底形は，「終止形」「感動形」「連用形」「連体形」という 4 種類に収斂できた。従来から指摘されている「補助活用」が「連用形」由来であることは疑いないことだけでなく，本稿では「詠嘆形」が「連体形」の「準体法」由来だと仮定することができることを示すことができた。形容詞の語幹基とそれに後接する接辞基との組合せに対応する音韻規則によって，形容詞の語幹とそれに後接する接辞との連なった形式としての表層形を正しく生成できる。

表 4　形容詞の語幹（基）の分類

語幹（基）の分類	学校文法用語	例語と語幹基
母音幹（基）	ク活用	高し　/taka/
子音幹（基）	シク活用	美し　/utukus/

表 5　形容詞語幹基と接辞基の組合せに係る音韻操作の規則の表

		後接要素	（文終止）	助詞「て」等	種々の接辞	名詞等		（「あな」に呼応する文終止）
							（「こそ」に呼応する文終止）	
活用型	語幹基末音素	接辞基	終止	連用		連体	（詠嘆）	感動
			/-(s)i/	/-(i)ku/	/-(i)ku-ar/	/-(i)ki/	（/-(i)ki-ar-e/）	/-(i)/
		音韻操作						
ク活用	/V/		／	i 削除	i 削除・母音融合	i 削除	i 削除・母音融合	i 削除
シク活用	/C/		s 削除	／				

4.　まとめ

以上，本稿においては，生成音韻論的分析手法を用いて，形容詞の語幹とそれに後接する接辞とについて，それぞれに，その基底形と（基底形同士の組合せに一対一に対応する）音韻規則を想定しさえすれば，表層形の音素列を生成し，正しく語幹を抽出することができると論じた。すなわち，形容詞とそれに後接する接辞との境界を厳密に，基底形でも表層形でも規定できた。また，いわゆる「已然形」の「こそ」の結びとなる場合について，その場合の接辞基の形成の機序についても明らかにすることができた。

今後の課題は，形容詞以外の語についても本稿の枠組みを活用して形態論的体系を再構築し，それが共時的にも通時的にも有用だと証明した上で，学校文法を更新することである。

参照文献

Frellesvig, Bjarke（2010）*A History of the Japanese Language*．Cambridge：Cambridge University Press.

影山太郎（2019）「日本語の述語膠着とモジュール形態論」岸本秀樹・影山太郎（編）『レキシコン研究の新たなアプローチ』1-25．東京：くろしお出版

清瀬義三郎則府（2013）『日本語文法体系新論――派生文法の原理と動詞体系の歴史』東京：ひつじ書房

国立国語研究所（2023）『日本語歴史コーパス　平安時代編｜仮名文学』https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html#kanabungaku（2024 年 8 月 15 日確認）

高山善行（2011）「述部の構造」金水敏他『シリーズ日本語史３　文法史』東京：岩波書店

鶴久（1963）「形容詞の已然形」国語学会（編）『国語学』54：10-19.

西山國雄（2012）「活用形の形態論，統語論，音韻論，通時」三原健一・仁田義雄（編）『活用論の前線』153-189．東京：くろしお出版

丹羽一彌（2012）「動詞述語語幹の構造」丹羽一彌（編）『日本語はどのような膠着語か――用言複合体の研究』48-65．東京：笠間書院

野田尚史（2014）「活用」日本語文法学会（編）『日本語文法辞典』108-111．東京：大修館書店

蜂矢真郷（2014）『古代語形容詞の研究』大阪：清文堂

早田輝洋（2017）『上代日本語の音韻』東京：岩波書店

福田嘉一郎（2019）『日本語のテンスと叙法――現代語研究と歴史的研究』大阪：和泉書院

松村明・山口明穂・和田利政（編）（2015）『旺文社古語辞典〔第 10 版増補版〕』東京：旺文社

村木新次郎（2014）「語幹」日本語文法学会（編）『日本語文法辞典』224-225．東京：大修館書店

山田孝雄（1948）『日本文法学概論　3版』東京：宝文館

利益相反に関する開示

本稿は著者が所属機関とは無関係に私的に作成したものである。その他，本稿に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

*責任著者　Koji DOI（Okayama Prefectural Niimi Senior High School）

le421104@s.okayama-u.ac.jp